おっぱいをチートさせる男

百合姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
おっぱいをチートさせる男

【Ｎコード】
Ｎ１９３６Ｚ

【作者名】
百合姫

【あらすじ】
注・この物語に下ネタはあまりありません。タイトルで下ネタを警戒した人にはご安心を。期待した人には申し訳ありません。
この物語は二次に良く見られる噛ませ犬として出される性格の悪いオリ主が主人公であり、そんな主人公が改心したけれど前の評判が評判なだけに肩身の狭い思いをする物語です。
（予定では）
いまいちイメージがわかないって人はとりあえず読んで見ると良いと思うよ！

作者が現実逃避としてバカな作品を書きたいと思ったがゆえの投稿です。ゆえにギャグテイスト。シリアスもあまり期待はしないでください。
そして更新速度に過度な期待はしないでください。
なおかつジュエルシード事件のみで完結するかもしれません。
またイベントの時系列が結構変わります。たとえばジュエルシード事件がなのはが９歳ではなく、１３歳の時くらいになります。

ぷろろーぐ（前書き）

始めに言っておきます。
感想などではオブラートに包んでね。
作者は非常に打たれ弱いのです。
ぷろろーぐは三ページ分くらい。
噛ませ犬的勘違い系主人公のアホさ具合をお楽しみください。
まぁそんなに量があるわけでもないですけども。
プロローグが終わると勘違いから改心します。
それとおそらく下ネタはあまり無いと思います。今回がピークってくらいかも。
今のところヒロインはいっそのことフェイトの母のプレシアにしてしまおうかとも思っていたりして。
レベル高すぎるかな？
そしてご都合主義は出来るだけ省きたいとは思ってます。期待はしないで欲しいですが。

ぷろろーぐ

おっぱい。
ある人は言った。
それは神秘のベールに包まれた神々の宝玉だと。

ある人は言った。
そこに全てを置いてきた。探し出せ、その秘宝を、と。

ある人は言った。
女体最高！！と。

ある人は言った。
胸とは。胸ではなくおっぱいである、と。

ある人は言った。
おっぱいを求めずして何を求める？
富か？名誉か？
否！！
男として生まれたからには至高のおっぱいを求めずして何とする。
と。

ある人は言った。
おっぱいに何が詰まってるかだって？
ＨＡＨＡＨＡＨＡ！何を今更なことを。
・・・ふっ。
浪漫が詰まってるのさ。

ある人は言った。

いや、胸に詰まってるのは脂肪だろ？と。

ある人は言った。
そういう夢の無い奴は腸(はらわた)をぶちまけて死ね、と。

ある人は言った。
人体の神秘。言い換えるならそれだね。と。

ある人は言った。
あの曲線美。柔らかさ。重量感。すべてにおいてマーベラス、と。

ある人は言った。
芸術はおっぱいだ！と。

ある人は言った。
小さなおっぱいも大きなおっぱいも等しく皆おっぱい。全てのおっぱいを私は愛そう、と。

『本当にそれで良いの？』
「ええ、もちろん。」
『男神じゃない女神の私には分からないけど・・・そんなので良いの？』
「はい。」
『・・・ま、まぁ頑張ってね？』
「ありがとうございます。俺、良い嫁さんを探します。」
『別にそんな決意を私に聞かされてもドウ答えれば良いか・・・』
「暗に貴方に嫁になってくれないかな？と。」
『ＨＡＨＡＨＡ、無理。貴方みたいな変態、好みじゃないから。』
「し、失敬なっ！！

揉むにしても決して無理やりには・・・」
『・・・はぁ。とっとと行って頂戴。気持ち悪いもの。貴方。』
「ふふふふ。これで俺のオリ主ハーレムが・・・ぐふふふふ。」
『本当に気持ち悪い。・・・じゃあね。』
「はい、本当にありがとうございました。」

こうして1人の男。
オリ主でイケメンな彼が異世界でハーレムを作るべく頑張ってみる物語が始まる。
はっきり言おう。
彼のその夢はかなわないだろう。
なぜならば。

『・・・勘違い系オリ主ってところかしら。
あんなの好きになる子が居たら・・・不憫すぎるわ。』

この物語は勘違い系の彼が主人公の物語である。
最近の二次創作には転生オリ主の他にままオリジナル主人公が出てくるが、その中でもヒロインに纏わり付く嫌われ者の勘違い系の噛ませ犬オリ主。
この物語は、その噛ませ犬側の彼から見た物語である。
果たして彼はまともな主人公となりえることが出来るのか？
気味悪がられずにヒロインに近づくことが出来るのか？

さてはて皆様。
「魔法少女リリカル☆なのは」の世界にようこそ。

ぷろろーぐ2

とある時刻、とある家庭にて。
ハイハイをする子供が居た。
もとい物語の主人公、相馬（そうま）　響（ひびき）である。

見た目は銀髪にオッドアイ。
彼の前世の生涯が閉じたのは中学2年。
まさしく厨二病に疾患してピークに当たる時期である。
そんな頃合に死んでしまった彼がそんな見た目になるのは当然のことで、厨二病を脱する頃合。もとい7歳になる頃にはきっと自分の容姿に悶絶するだろう。「なぜあの時に、こんな奇抜な見た目を選択してしまったのだ！！」と。
多分。きっと。おそらく。
してくれると良いな。

現在の彼は早速発情していた。

「・・・ふふふふ。俺の母親がよもやこんなに美人だとは・・・近親相――――げふんげふん。も、悪くは無い。
何、俺のイケメンを持ってすれば・・・」

ドンビキである。
生まれて数年で母親とのチョメチョメを考える人間。
あまりの非常識ぶりに本当に貴様、日本人か？と問いたくもなるのだが、自然界では親と子の交配は至極当然のようにあるし、血統的にも問題は無い。
別に良いのでは？という気もしてきたのは、あまりの思考回路ゆえに彼を人間としてではなくその辺の獣と同列視してしまっていると

いうことなのだろう。一応反省しておこう。
あれでも彼は人間なのだ。
それはさておき。

「あら？おっぱいが欲しいのかしら？」

母親である相馬　文香（ふみか）に遠慮なくむしゃぶりつくところを見て戦慄しつつも思うのは、目が血走りすぎで怖いと言うことである。
目が血走りながら乳房をしごきつつ吸い付く赤子。
下手なホラーよりも怖い。

「・・・うますぎるっ！！」

と吼えながらも母親の乳房にがっつく響。
全国の赤子や君のような子供を産んでしまった文香に謝ってあげたいほどにその姿は醜かったと言っておく。
これを見ても自然な笑みを絶やさないとは母親は偉大である。
否、文香が偉大なのだろう。絶対。確実に。それしかない。
きっとそう思う。
そもそも彼の毛の色や目の色的にこれを我が子として愛せる彼女はまさに聖母と言えよう。

「・・・くっ・・・いかん、もはや眠くなってきた。」

今更であるが彼の言葉は全て「あー」とか「うー」とかである。赤ん坊なのだから当然のこと。
それを意訳してお茶の間に届けているこの作業。
早くも苦痛と化してきたのだから気が滅入る。

そして彼はそのまま寝た。

寝る子はすくすく育つと言うがこのまま眠るように死んでくれたほうが世のため人のため。
何よりも罪の無い母親が救われるような気がする。

「ふふふ・・・凄い旺盛な食欲ね。」

ちゃんと食べたのを見て安心したのか文香は満面の笑みを浮かべた。
母親としては至極真っ当なセリフなのだが、それが向けられた相手が彼となると複雑な気分である。
・・・ここに、ここに聖母がおるきん。眩し過ぎて目が開けられないんじゃぁ・・・

せめて彼女の元で彼が真っ当な道を歩めるよう、祈るしかるまい。
余談ではあるが母子家庭で父親は蒸発済み。

あまり良い人ではなかったそうな。

ぷろろーぐ2（後書き）

全体的にプロローグは短いです。
なぜかあまりネタが思い浮かばないもので・・・先のほう先のほうはガンガン思いついているのですが。
よって、ちゃっちゃと進めることにしました。

ぷろろーぐ3（前書き）

これにてプロローグは終了。

ぷろろーぐ3

子が育つのは早いと言うが、それを証明するがごとく、あっという間に9歳となった響が居た。
彼が通うこの小学校にはヒロイン候補がいる。
言わずもがな、高町なのは、月村すずか、アリサ・バニングスである。

もちろんのこと彼は煙たがられた。
なぜかと言えば単純明快。
変態でキモイからだ。
さらに言えば残念ながら厨二病は治らなかった。

「やぁ、アリサ、すずか、なのは。」
「お、おはよう・・・」
「・・・響君・・・おはよう。」
「いい加減殺したくなってきたわ。」

にこやかな響の挨拶になのは、すずか、アリサはげんなりとして応える。
いや、アリサは応えてなかった。いや、これはきっとアリサ流の返答なのだろう。
いいぞ、もっとやれ!!
大丈夫。ちょっとだけだから。ちょっと殺すだけだから。
今なら一万円上げるから。ね、ちょっとそこの人気の無いところに連れてってさ。
こう、サクっとね?
「今日も可愛いね。」

「あ、ありがとう。」
「そ、そうでもないよ」
「・・・そんなことどうでもいいからとっととどっか行ってくれない？」

なぜここまで彼が嫌われているかと言うとそれは彼の日ごろの目線である。
簡潔に言うとエロい。
人間というのは鈍く見えても意外と敏感で、たとえば今目の前で起こっているように相手が下心を持って近づいてくればもちろんのこと分かる。
目線で、もろバレなのだ。
じろじろと撫で回すような視線。
変態じゃない彼女達にとってそれは酷く不快感を与えるものだった。
そうした下心を隠せる巧妙な男もいるが、こちらほど性質が悪くないのが唯一の救いである。

「ていうか、あんたどうしていつもいつも私たちのところに来るのよ。毎回言ってるでしょ！寄ってくるなって！！」
「ふっ、野に咲く可憐な花を見に来てしまうのは、美しき蝶の宿命さ。」
「はぁ？」

ぷくっ・・・くくく・・・美しき蝶ね？
宿命とか・・・ぷはっ！！

失礼。つい失笑してしまったのだが、次の問題がコレである。
これまた簡潔に言うならば意味が分からないことを言ってるということだ。

思い出して欲しい。
彼女達は9歳児である。
そんな気障な話をされたところで彼女達の脳内では「野に咲く花に蝶が寄ってくるのは当然のことだよね」というそのままの字面で受けとっている。
すなわち。

「この話の流れでいきなり蝶の話されても意味が分からないんだけど？」
「おや？わからなかったのかい？
ふふふ、初心な子羊ちゃん達だ。」
「ああ　？
アンタバカにしてんの？」
「あ、いや、そうではなくてだ。これは野に咲く可憐な花を君たちに例えてーーーぶるはっ！？」
「あ、アリサちゃん。さすがに殴るのは・・・」
「いいからいいから、ほら、とっとと行きましょ。」
「ぐふっ・・・ツンデレか。現実のツンデレとはかくもシンドイものなのだな。」

こうして彼の勘違いは増えていくのだった。
というか、もっとやってくれないだろうか？
もっと熱くなれよ！！
どうしてそこで去っちゃうんだ！！
あとちょっとで殺せるんだぞ！！
もっともっともっと熱くなれよ！！

あ、良い忘れたが彼の口調にも問題はある。

何よりも致命的なのが彼のその勘違いスキルにあった。
彼が煙たがられているにも関わらず接触を持とうとするのは、別に嫌われていることに興奮する性質を持っているわけではなく。
ただたんに恥ずかしがっている、素直になれていないだけと考えているからである。
すなわち。
嫌われているのにも関わらずしつこく空気の読めてない人間がこれまたしつこく話しかけてくる。
非常に嫌な出来事と言えよう。

そして、そんな彼の行動はとある結果をもたらした。

「てめぇ、いい加減にしろよ！なのは達が嫌がってるだろっ！？」
「何を言う？
君こそ彼女たちを開放したまえ。きっと君が脅しているのだろ？」
「はぁ、はぁああっ！？」

そう、新たな転生者による苦情である。
彼は原作非介入派であまり下心を持たず、なんやかんやでなのは達に気に入られた転生オリ主。
なのは達に日々無自覚な嫌がらせをしつづける響に対して文句を言いに来たのだ。

なのは達がなんだかんだで響を退け切れないのは彼が生理的に嫌いでも悪人では無いということに起因する。
相手に悪気が無く、なんだかんだで直接的で決定的な害が無いために特別お人よしな彼女たちとしては彼を退け切ることは出来なかったのだ。

そんな中立ち上がったのが、チートオリ主の彼、山田君（仮称）だ。

個人情報保護法のため、この場では仮名を使っている。
彼はいたって普通の両親の元に生まれ、原作怖いとか良いつつもご都合展開によってなぜかなのは達と近しい展開になったという背景を持つ。正直此方のほうが我らがバカな主人公よりも腹ただしい気がする。
原作介入したくないとか言っておいて、どうせがっつり介入するんでしょ？
フェイトの母親に「なんでフェイトを娘と見てやらないんだ！！」みたいな熱血な説教するんでしょ？
どの口で原作に介入しないとか言うのか。
いや、それこそが主人公体質と呼べるものなのかもしれない。
残念ながら響にはそれが無いようである。
そしてなぜか「名前で・・・なのはって呼んで！」みたいなフラグを立てつつも現在、響にとっては程遠いチートハーレムを形成しつつある山田君。

今回の案件も彼の好感度はうなぎ登りで、響の好感度は格段に下がることとなるだろう。
山田君はきっと「かませ犬ありがてぇ」などと思っているに違いない。
と言ったら彼は怒ってこういうだろう。
「ただあいつらの笑顔が曇るのが見過ごせないだけだ！！」
はいはい。主人公やってますねぇ。
無欲アピールとか要らないです。

「は、話が通じねぇ。」
「まぁ君の気持ちも分かる。
だがね。彼女たちが迷惑してるのは歴然たる事実であってーーー」
「いや、だからオマエの行動が・・・」

その後、結局平行線のまま話は終わった。

そんなある日のこと。

☆　☆　☆

彼の勘違いが解ける日がようやく来たのである。
発端は放課後。
彼のチートの一つにおっぱいチートと呼ばれるものがある。
彼が求めたチートで恐らく未来永劫誰も望まないであろうチートだ。
そのチート内容とはおっぱいを自由自在に操ることにある。
色々語りたいのは山々であるが、それは後の機会に譲るとして、話を進める。

そう。
あろうことか彼はなのはのーーー幼女の胸を揉みしだいたのだった。
そこに至るまでの経緯はあまりに見っともなく、しょうもなく見ていられなかったので省くが年頃――――とまでは行かないが女の子が胸をイキナリーーーそれも嫌いな男に揉まれたらどうだろうか？
もちろん怒る。
下手をすれば精神的な傷。もといトラウマも与えかねない。
彼はそんな致命的かつ最低なミスを犯してしまったのである。

もちろん彼は無理やり揉むなどと言う外道ではない。
勘違い野朗ではあるものの、よくも悪くも日本人なのである。
悪人ではないし、そんなことを考えたことも無く、むしろ女性関係に関しては初心なくらいである。
歯の浮いたセリフを吐けるのも、彼女たちがまだ小さく、幼女だからであり、忘れているかもしれないが記憶を持ったまま転生した彼にとっては娘のようなーーー歳の離れた妹のようなもの。

なんだかんだで別に欲情していたわけではない。
というか当然のことである。

しかしーーーいや、それがゆえに悲劇が起こった。
彼の認識ではあくまでも好かれていると思っている。
なおかつ、自分よりもはるかに年下のーーーもとい今はまだ子供としてしか見てない、なのは。
彼は善意で将来的に胸が大きくなるようにチートを発動させておこうと思ったのだが、それが良くなかったのである。
とても身勝手で自己中心的な善意。
すなわちありがた迷惑は無常な現実として彼の身に迫った。

大問題となったのである。
まだ二次成長も迎えてないとはいえ女の子の胸をがっつり揉みしだいたことで親御さんにも伝わり、もちろん彼の母親の文香にも伝わった。
なのははなのはで号泣。
先生にも伝わったし、すずかやアリサは完全に軽蔑する眼差しをむけるようになり、彼の一切合切を無視。
なのははなのはでしばらくの休校の後、復帰。
彼を避けるようにはなったものの、なんとか立ち直ったようである。

もちろんクラスのほかの子にも伝わり、あらゆる場面へと彼の行動の結果が伝播した。

虐めを心配した文香が転校を薦め、響も転校を望んだ。
そう。
彼の勘違いは1人の女の子を泣かせてようやく解けるほどに重症だったのである。
もちろんのこと、彼は嘆いた。

泣きながらに謝った。
許してもらおうだとかそんなことは微塵も考えず、ただただ申し訳なさで一杯でひたすらに謝った。

もちろんなのはの父親や他家族はそれで許せるはずも無いが、子供のやることとして許したと言うことになった。
そうしたけじめを付け。
彼はなのは達が通う学校を後にした。

彼の後姿はまるで別人のようだったという。

主人公の一日（前書き）

このまま三人称でいくか、主人公視点にするか。迷い中。
その件に関して感想をいただけると嬉しいです。

主人公の一日

あれから半年の月日が流れた。
彼はと言うとそれはもう、猛省した。

『大丈夫ですって。そろそろ頑張ってみましょ？』
「そうだろうか・・・アイシテル。俺は怖い。また大きな罪をこの手で犯してしまうのを・・・」
『はい、その言い回しは厨二くさいので直しましょうね。』
「・・・俺は厨二じゃない。もう目が覚めたし。」
『厨二の人は誰もがそう言うの。』

今彼が居るのは自室。
神様から貰ったチート特典の一つ。
神様に用意してもらったデバイス“アイシテル”と話している。
二対のナイフ型デバイスであり、片方はベルカ式でカートリッジを搭載しているため、非常にゴツい。
もう片方はすらりと長いスリムなミッド式の魔法が組み込まれたナイフである。
近接戦や身体強化に置いて優れているベルカと、小手先や技術、手数の多さに優れているミッド式。
どちらの魔法も満遍なく十二分に使えるという特殊なデバイスである。
待機状態はナイフを模ったネックレス。服の下に入れておけば一番目立たない形である。
普通のインテリジェントデバイスよりは遥かに感情豊か。
ちなみにドイツ語を喋っている。

良い機会なので彼のチートを振り返ってみた。

まず一つはその容姿。
銀髪オッドアイ。
しかし、これは現在では意味を成さなくなっている。
アイシテルによる変装魔法で一般的な黒髪黒目の人間にしているのだ。
理由は言わずもがな。

二つ目は神様印のデバイス。
アイシテルの性能は下手なロストロギアよりも強力で、ジュエルシード並みの魔力貯蓄機能があったりとチートらしいチート。なのだが、どんなスーパーコンピューターも扱う人が幼児並みの知識と能力値しかないのでは宝の持ち腐れ、豚に真珠、ぬこに小判、というもの。
一度もセットアップしたことが無い。
彼はこの世界について美少女がヒラヒラした服を纏って飛び回る。程度の認識しか持っておらず（逆に言えば彼にとってはそれが全てであり、それで十分だった）、そもそもデバイス自体この世界のコンピューターだとしか考えていない。
もちろんこの時点からして勘違いなのは言うまでも無いことである。
何が言いたいかと言うと、彼はデバイスを単なる便利な魔法が使える生活を助ける道具、程度にしか考えておらず、戦いに使えるなどと微塵も灰燼も気づいていないのだ。
そしてそれを知りつつも面白そうだと言うことで放って置くアイシテル。
これまた現状では使えないチートである。

三つ目は言わずもがな我らが夢。おっぱいチートである。
よく考えて欲しい。
全てのヒロインに直面する絶対的な悲劇とはなんであろうか？

・・・引っ張る意味も大して感じられないので早々に明かしてしまうが、それは「老い」である。
どんな可愛いヒロインも時が流れれば老化し、言い方は悪いが劣化する。
いつまでも若々しい姿で。
これはほぼ全てのーーー容姿に自信を持つ人間であるほど必ず抱く欲求の一つではないだろうか。
もちろんアニメを見ていると言う立場であるならばなんら問題は無かったのだが、同じ世界に現実として生まれた以上はそうしたヒロインの姿も見なければならない。
自然の摂理とは言え、それを解決する手段があれば望んでしまうのが人の業という物だ。

耳障りは悪いがおっぱいチートはそんな夢を叶える最高のチートと言える。
劣化によって垂れるおっぱい。
垂れたおっぱいは二度と戻らないと言うのが現在の学説で、事実そうである、らしい。
巨乳キャラであればあるほど何十年後かにお世辞にも綺麗とは言えない肢体を晒す事になる。
もう少しオブラートに包むべきなのだろうが、どんなに言い繕っても厳然たる事実であり条理である。
ゆえに目を背けるようなことはしてはならない。

二次元に置いてはそんな心配はいらなかったものの、その世界に暮らすとなれば１０年、２０年と先があり、魔法的な何かが無ければ等しく老いさらばえ、おじいちゃま、おばあちゃまと化す。
加齢臭もするだろうし、皺も増えていく。
背骨が曲がり、筋肉や脂肪がこそげ落ち、歩けなくなるかもしれない。

だが安心してくれ。
このおっぱいチートは微乳、ひんぬう、巨乳、爆乳、横乳における曲線美の調整や下乳において良く見えるように脂肪の配置や柔らかさを微妙に変えることによってうんぬん、あのキャラが巨乳であれば、ひんぬうであればという願望を叶えることもできるーーー「おっぱいを操る程度の能力」ではあるがその能力にはレベル2があり、そのレベル2はまさしく神の御業とも言うべき効果を発揮する。
そう、名づけるとしたならばアンチエイジングＥＸである。

アンチエイジングとは意訳し、分かり易く簡潔に述べるならば老化防止のことを言う。
とはいえ生きていれば老化していくのは自然、老化しないのは不自然である。
防止と言うよりは抑制といった方が正しいか。
そんなアンチエイジングの効果を極限まで高め、全く別物し、上記の正しく老化“防止”を実現させたおっぱいマッサージ。
それがレベル2の効果だ。
具体的なメカニズムを語るのは省略するが、とにかく凄いおっぱいマッサージで老化を防止し、どうにかしておっぱいの時を止め、しかしおっぱいはおっぱいという単体の生き物ではないーーーゆえに体にもその時の留まりが影響し、すなわち寿命で死ぬことは無い不老と化す能力。

畏怖されるべき異能（レアスキル）である。
戦慄してくれても構わない。狂喜乱舞してくれても構わない。
どこぞの学園都市であるならば女性研究者によって研究され尽くすであろうこの能力。
おっぱいーーーいや、胸を揉めば男にも効果を発揮する正しく等しく全てのおっぱいーーー男の場合は胸とするーーーをチートさせるこの能力。

もしばれれば比喩ナシに真面目に解剖されるに違いない。
と熱心に語りすぎたところで閑話休題。
彼は自室でアイシテルと話しながらもとある本を読んでいた。
『猿でも分かる乙女心』
そう、彼は勘違いスキルを消し去ろうと努力しているのである。
涙ぐましい努力。
その姿に拍手をせざるを得ないが、したところでなんだというのは明白。
とりあえず拍手は自重した。

「アイシテル・・・乙女心はかくも難しいんだな。」
『それを読んで分かった気になってたら、また勘違いするよ。きっと。』
「・・・どうしてそういうことを言うんだ。頑張ってるんだから応援してくれれば良いのに。」
『だって・・・せっかく間近で勘違い系主人公の滑稽な姿を楽しめるからと神様に志願したのに。結局良い子ちゃんっぽくなってるんだもん。私つまらない。』
デバイスは志願制らしい。
「・・・俺を怒らせると酷いぞ？」
『どうするっていうのよ？勘違い坊や。』
「納豆ごはんに混ぜ込んでやる。」

汚いと思うよ？
そして君は金属の塊を食べようと言うのだろうか？

『ぶふっ！？な、なんていう鬼畜。げ、外道っ！！外道だわっ！？
私の美しいボディが納豆菌で汚れるじゃないっ！？』
「嫌だったらこれを教えろ。」
『ん・・・何々？
葛藤？これが何？』
「かっとうーーーって読むんだな。」
『・・・。』

デバイスがアホの子を見る目で見つめた。
目、無いんですが。

「しょ、しょうがないだろっ！？
中学二年の時に死んだんだから、学があるわけじゃないんだよっ！
！」

そして彼は本を読み終わるとおもむろに胡坐をかき、手を股のあたりに置く。目を瞑って身じろぎもしなくなる。

瞑想である。

ちゃんとしたオリ主であれば瞑想と聞けば「体内の魔力を感じ取る訓練か！」とティンと来るものだが、彼の場合は違う。
彼女達の将来が楽しみがゆえについついエロい視線を向けていたーーもといこの色欲を抑制する訓練である。
まず彼は魔力がどうとかというよりもその人格の矯正から始めた。
アホである。が、切実な問題でもある。

瞑想をし、できれば悟りを開くのが目的だが、ドウ考えてもそれは無理に違いない。
彼の思考回路を除いて見る。

おっぱい・・・無限のおっぱい・・・
いや、待て待て。
おっぱいは違う。おっぱいなんていらないんだ。
だがしかし、おっぱいというのは如何せん俺の心をつかんで離さない。
これほどまでに拒絶してもおっぱいが出てくるということはもしや俺の心に巣食うおっぱいはただのおっぱいじゃないんじゃないだろうか？
きっとおっぱい型宇宙人などが俺の精神から侵略し、体をのっとり、俺の体のいたるところをおっぱいに変えるに違いない。
それは嫌なようで嬉しいかもしれない。
そもそもおっぱいチート自体、おっぱいを揉むための口実がてら貰ったようなものだし、自分の体がおっぱいとなりえるなら誰かのおっぱいを求めて徘徊せずに済む。が、自分の体のおっぱいで俺は満足できるのだろうか？
おっぱい神としてーーーいや、おっぱいの神を名乗るのはまだ早いか。
最低限おっぱいスカウターの技術を会得しなければーーー
というかおっぱいを考えていたら肉まんが食べたくなってきた。
あの白い肌にホカホカの具。正直肉まん神。チョコまんなるものもコンビニに売っていた気がする。
チョコまん。中々惹かれる。そういえば犬にチョコを与えるといけないとか聞くが一体どうしてだろうか？
ネギもそうだったな。あ、ネギはあれか。ユリ科の植物か。
ユリ科の植物には毒が含まれてるとかなんとか。だからかな？たま

ねぎやネギは大丈夫なのだろうか？
今まで食ってたんだけど・・・いや、そもそもユリ科の植物だっけ？

非常にドウでもいい思考回路だった。
結果から言えば一年後ぐらいには彼はなんとかエロから脱する。
頑張ったね・・・うん。

「ご飯よぉ。」

下の階から母親の文香が晩御飯に呼ぶ声が聞こえる。
こうして彼の一日は終わる。

ＰＴ（プレシアテスタロッサ）事件の始まりはすぐそこである。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1936z/

おっぱいをチートさせる男

2011年12月9日01時11分発行